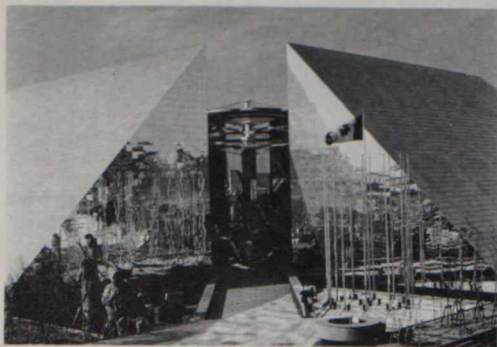


カナダの近代建築

谷村秀彦



大阪万博のカナダ館。

建築の伝統とフランス建築の伝統である。それぞれの国の伝統の中で、建築を学ん

うして生まれてきた。カナダ的現代建築とは一体どんなものだろうか。それについて考えてみたい。

他のカナダ文化と同様に、カナダ建築

カナダの現代建築については、世界的にみても極めて高い水準にあるにもかかわらず、その特徴が肥えがたいため、わが国では専門家以外にはあまり知られていない。日本の人々にカナダの現代建築の水準をかいま見せてくれた唯一の例外として、大分旧聞になるが、大阪万博のカナダ館があげられる。これは、バンクーバーの建築家アーサー・エリクセンの設計した作品で、日本建築学会賞を獲得したことは、まだ覚えておられる方もあるかと思う。カナダの建築が、カナダに存在するという以外に、ある共通の「カナダ的」といえる性格をもつようになったのはそう古いことではない。現在でも、こうした共通の性格はなかなかとらえがたいのが現実であるし、また、カナダの建築家自身も、特に「カナダ的」なものを意識して設計している訳ではない。カナダの社会的現実の中で、カナダの社会に最もよく適合する建築を作ろうと努力していった結果として、そこに「カナダ的」といえるある共通項が生まれた。きた、といえは正しいかと思う。ではこ

だ建築家がカナダに渡り、それぞれの文化に基いた建物を作りあげた。特に公共的な建築にこの傾向が強く、現在各州にある州の議事堂や主要な教会などは、同時代に建てられた本国の建築とほとんど違わないといつてよい。もちろん、本国から遠くはなれた地であるから、材料的な制約もあり、簡潔化されているものも多い。

第一次大戦が終り、再び繁栄がおとずれると、ヨーロッパにはじまった近代建築運動が北米においても受け入れられるようになるが、大恐慌につづいて世界は第二次大戦に突入してしまふ。

大戦後の混乱から脱出し発展に向う経済の中で、これまで控えられていた建設活動が一斉に進められた。こうした建設活動のたかまりの中で、今私たちが「カナダ的」と感ずる性格が育てられていった。カナダの建築家がこのことに気づくきっかけとなったものとして一九五六年に創設されたマシーメダルが挙げられる。これは、各年に建てられた優れた建築に与えられる賞であるが、これによって、バンクーバーの建築もトロントの建築も、ひとつの土俵の上で評価されることになったのである。美しい自然とバイオニア精神に育てられたバンクーバーを中心とする西海岸の建築、伝統が生きているトロントの建築、フランス文化の香り豊かなモントリオールの建築、こうしたそれぞれの特徴がはじめて全国的なスケールで見なおされるきっかけが、マシーメダルの創設によって作られたと言つてよい。

こうして開花したカナダの現代建築の水準を世界に問う機会をもたらしたものが、モントリオールのエキスポ一九六七



モントリオール万博会場に建設された、モシュ・サフディ設計のアピタ実験住宅。

であった。カナダの各地から集められた建築家が、世界の建築家と肩をならべてその技を競つたのである。特に、このエキスポで注目されたのは、モントリオールの若い建築家モシエ・サフディの手になるアピタ実験住宅の建設であった。カナダの一般市民がはじめて認識したのが

マコーロス・レーベンソルド・サイズをあげなければならぬ。フランス・デザールをはじめ、フランス・ボナパンチュールなど、モントリオールの中心地に多くの作品がある。オタワに作られた国立芸術センターもこのグループの手になっている。

トロントは多数の一流建築事務所があるが、最近注目すべき作品を数多く発表しているグループとして、日系カナダ人であるレイモンド・モリヤマ、都市再開発に活躍しているジャック・ダイアモンド、トロント大学スカボロ・キャンパスで知られるジョン・アンドルース、トロント大学などヒューマン・スケールの建物を作っているロン・トムなどを挙げることが出来る。特にレイモンド・モリヤマはオンタリオ科学センターをはじめ各種の公共建築をてがけ、最近ではスカボロの市庁舎が話題を呼んでいる。

モントリオールのエキスポであったといつてよい。都市計画の観点からみても、エキスポの開催にあたって、モントリオール市は北米の都市としては戦後をはじめ地下鉄を建設している。プラス・ビル・マリーを中心とする地下街は、その規模、デザインともに、世界から集った人々に、モントリオールの町づくり技術が世界の最前線にあることを認識させた。

昨年のモントリオール・オリンピックでは、時間に追われながらも昼夜兼行の突貫工事で壮大な施設を完成させたことは、記憶に新しい。

大阪万博のカナダ館を設計したエリック・ソン・マシー事務所がバンクーバーを代表する建築設計事務所であるとすれば、モントリオールを代表する建築家グループとしてアフレック・デスバラツ・デイ

会の中にあつてそれに最も適合する建築を設計した結果、「カナダ的」といえる性格が自然に生れてきたのであつて、特に「カナダ的建築」を作ろうとする文化運動があつた訳でもなく、また特定のモ



レイモンド・モリヤマ氏の設計による公会堂(トロント市内エドワーズ・ガーデン)の内部。